

## 検討と実現を願う

江藤秀一

現代語・現代文化学系教授

前号の特集は「2010年の筑波大学の教育を考える」であったが、編集部の意図があったのか、それとも図らずもなのか、「私の提言」、「学内トピックス」といった常設の随筆も、そして、「事務区の目」も、「これからの筑波大学を考える」という大きなテーマに沿って書かれているように感じられた。そして、どの執筆者にも、筑波の今後のあるべき姿を真剣に考えている様子がかがわれ、いかに筑波大学を愛しているかが伝わってきた。

全体を通して「教育基本法」に言及した方がお二人あり、また、「教員の心構え」に触れた方もお二人あったことも興味深かった。複雑で不透明な場面において将来を考えるとき、基本に立ち帰ることは一つの方法であろう。また、教員の心構えに関しては、私も常々同じようなことを考えている。入試や教育の制度的な問題もさることながら、教育にとって

最も大切なことは指導する我々教員一人一人の心構えであろう。我々はだれもが教育と研究は車の両輪であると信じ、自分では研究同様、教育にも熱心にあっているつもりであるが、「ある語学の試験では毎年、同じ問題が出題されるそうだ」という伝聞が紹介されると、まさかそんなことがあるものかと反論しながらも、我が身を振り返ってみた。

巻頭にある「つくば市を呼び寄せ高齢者が自立できる街に」というエッセイも実は筑波大学の将来とも無縁の問題ではないと思う。イギリスのケンブリッジの町は大学町として古い歴史を誇るが、それは大学の存在だけが誇りではなく、Town and Gownsの言葉に象徴されるように、住民と大学とが渾然一体となっている点である。筑波はその点まだ歴史が浅い。住民も若い。いろんな住民、老若男女がそろって、そして、住民の活動と大学の活動が自然と溶け合うとき、一人前の学園都市と言えるようになるのであろう。そういう意味で、筑波大学の将来を考えるとき、町のありようも一緒に考える必要があると思ったのである。

読み終えて、今号のような熱のこもった提言や提案が、様々な場面で検討され、可能なものは実践されることを願った。

(えとうひでいち・英文学、英国文化)